

『恵みとまことに満ちている』 ヨハネ1:14-18

1:14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。

1:15 ヨハネは彼についてあかしをし、叫んで言った、「『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである」。

1:16 わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた。

1:17 律法はモーセをとおして与えられ、めぐみとまこととは、イエス・キリストをとおしてきたのである。

1:18 神を見た者はまだひとりもない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。

●序論

15節のバプテスマのヨハネのイエス・キリストについての証言。

「…『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである」。

福音書の筆者使徒ヨハネも、このキリストが、人となられてこの地上におうまれになった「神のひとり子」とであると証言しています。

そしてこのヨハネははっきり言うのです。

「わたしたちはその栄光を見た」と。

けれども先日お読みした個所では、その逆との対比も記されていました。

:11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった。

:12 しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

先日、洗礼式を持ちました。

これから「信仰によって」しか見えない世界がある。「信じている」からこそ見ることのできるものがあります。

それがイエス・キリストです。そしてキリストが約束してくださったいのちの世界です。それはだれもが直面するであろうこの地上での生涯を終える時にも、信じて望み見ることのできる永遠の命の希望です。

そうして、「わたしたちはその栄光を見た」という証言に、アーメンということができる生涯へと迎え入れられているのです。

●本論

I. 神の御子イエス・キリストに見る

1:14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。

ここで「見た」という言葉。ただ街角でイエスさまを”見かけた”というのではない、

この方の内に、この方に何を見たかという証言を記しています。

「…それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。」さて今読んでいるこの書は、聖書の中でも「福音書」と呼ばれるものです。イエスさまの言葉やみわざを記録することを通して、イエスさまが何者なのかを、伝えていメッセージです。つまり、救い主キリストであることを伝え、人々へこの方を信じる幸い、また信じて生きることのすばらしさと違いを伝えていきます。

その中には皆さんもよくご存じの、ベツレヘムの馬小屋であったクリスマスの物語も含まれます。歴史上の美しいエピソードの紹介で終わりません。そこに神がこの人の世界に、歴史の中に救いをもたらそうと来られたと告げられているのです。

1:14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。

LB):14 キリストは人間となり、この地上で私たちと共に生活なさいました。わたしたち人と共に生き、そして命をくださったことを示す物語をヨハネは語ります。この方にこそわたしたちが受け取るべきいのちの言葉、いのちそのものがあると。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

Ⅱ. 律法を超えている

バプテスマのヨハネの証言もあげられています。

1:15 ヨハネは彼についてあかしをし、叫んで言った、「『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである」。

「わたしが言ったのは、この人のことである」と伝えました。

繰り返します。なぜ伝える必要があったのか？なぜこのメッセージが必要なのか、それは、このキリストを信じてほしい、信じて命を得てほしい、それはかけがえのないことだからと…言うのです。

さて、当時のユダヤの人々において、そして今に至るまでも、旧約聖書でモーセの十戒に始まる、神からいただいた律法というものについて、その言葉、その戒めを守ることの重要性が強調されます。

神さまの律法を守ること。しかし旧約聖書を見ていくと、選ばれた民と呼ばれるユダヤ人たちでさえ、何度もその神さまから離れ、律法を破り、罪を犯して裁かれるということを繰り返す、それが記録されています。

なぜ人は、神からの善い律法をいただきながらも、繰り返し失敗し、神さまを悲しませるのでしょうか？

そこに人々は律法を見て、律法を守る努力を繰り返していながらも、その律法をくださった神さまから目をそらし、神さまを信頼することから遠ざかって、自分たちの秤で自分たちの正しさを主張するようになってきたからです。

この歴史から、わたしたちがはっきり知らなければならないこと。

律法は、聖なる者であり、良いものですが、律法によっては誰一人神さまの前に「正しい人」として立ちうることはできないということです。

律法には、人を新しく作り変える力はないということです。

律法によっては、かえって罪の自覚が生じるばかりであるというのが、聖書が記録する人のありさまであり、またメッセージなのです。

ローマ3:20 なぜなら、律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とせられないからである。律法によっては、罪の自覚が生じるのみである。

今日聖書はこう語ります。

1:17 律法はモーセをとおして与えられ、めぐみとまこととは、イエス・キリストをとおしてきたのである。

神の恵み、神のまことが、イエス・キリストを通して私たちに与えられていると。そして招かれます。この方のもとに来なさい。この方を信じなさい。この方の赦しを受け取りなさいと。

それが、ユダヤ人であろうと、また今日のヤクザの方であろうと、だれであろうと、律法によっては決して変えられない、救われないのです。

しかし、神さまは確かに救う方を遣わされた。それがイエス・キリストなのです。ヨハネはその栄光をこの方に、この方の十字架の出来事に見たのです。

この方に「めぐみとまこととに満ちていた」と。

Ⅲ. わたしたちに向けられている

1:16 わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた。

キリストの内に神さま由来の「めぐみとまこと」が満ちている。しかもそれは、神の御子イエス・キリストが十字架につかれ、すべての罪を清算した上にあらわされている神の「恵みとまこと」です。

その上で、「めぐみにめぐみを加えられた」という、ユニークで印象深い表現を、今日覚えて帰ってください。これがわたしたちが信じ、受け取るべきことだからです。

あれ？ 恵みって、一回いただければ、それで十分じゃないの。恵みに恵みっていうと、一回でたりないから？と不思議に思われる人もいるかもしれません。

はっきり申し上げます。わたしたちの信仰の人生と生活の中で、このめぐみにめぐみをいただくことがどれほど大切か、それを忘れないでいただきたいのです。

そして恵みに生きる日々をスルーしないでいただきたいのです。

では改めてめぐみとは何か。表現の比較ということで、こんな風に記されている物を読んで、私もなるほどと思いました。

「公正」は、当然受けるべきものを受け取ること

「憐れみ」は、わたしたちが当然受けるべき結果と裁きを、神が免除してくださるということ。

★「恵み」は、神が、わたしたちに受けるにふさわしくない好意と恩恵を与えてくださることだと。

わたしたちはともすると、救われてから数年、わたしなど数週間、数日で、また自分の力や正しさに頼り、ある意味で自負と経験を重ねて、恵みとキリストから遠ざかるということを繰り返してきました。

昔は、そういう心や進行状況を「霊的なスランプ」などと言いましたが、何のことは

ない、キリストの「恵み」を求めない、必要としない、信じていない信仰生活の中を歩んでいたことに、大きく挫折して気づかされる経験を持つのです。

神さまは、いつでも「わたしに頼りなさい」というわたしという恵みを通りなさいと語られ招かれるのです。

しばしば人は、悩みの中でそれに気づかされます。

そんな時、「大丈夫、私に任せなさい」という言葉を聞くことが大切です。わたしが状況や人をコントロールする術はありません。たとえ何かできたかのように見えても、それが人の方法であるならば、そこにはほころびが生まれます。

わたしたちが目を向けるべきは、キリストなのです。

この方の恵みは一度きりでお終いではない。

決してスルーしない。それがわたしたちに示されることです。

聖書は、はっきりとイエス・キリストに「めぐみとまことが満ちている」と言います。

そうして、こう語っています。

:16-17 わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた。…めぐみとまこととは、イエス・キリストをとおしてきたのである。

この恵みの中を生きるために、互いに励まし、そしてともに祈り合いましょう。